

Title	宮沢賢治の信仰遍歴：作品「復活の前」「霜林幻想」における暁鳥敏をめぐって
Sub Title	Kenji Miyazawa's wanderings of his faith : Haya Akegarasu quoted in Fukkatsu-no-mae and Souringensou
Author	深田, 愛乃(Fukada, Aino)
Publisher	慶應義塾大学大学院社会学研究科
Publication year	2021
Jtitle	慶應義塾大学大学院社会学研究科紀要：社会学心理学教育学：人間と社会の探究 (Studies in sociology, psychology and education : inquiries into humans and societies). No.91 (2021.) ,p.(17)- 33
JaLC DOI	
Abstract	<p>This paper aims to clarify the relationship between the conversion of Kenji Miyazawa (1896–1933) from Jodo Shinshu (the True Pure Land Sect of Buddhism) to the Lotus Sutra (Hokeykyo) and how his educational thoughts were formed by analyzing the process of his separation from the ideology of Haya Akegarasu (1877–1954), a monk of Jodo Shinshu. Previous studies indicate that the educational thoughts of Kenji Miyazawa, a teacher of an agricultural school, were based on his faith. However, it has not been clear how his educational thoughts were influenced by the wanderings of his faith from Jodo Shinshu to the Lotus Sutra and Nichiren-ism. Therefore, this paper first discusses the relationship between Kenji Miyazawa and Haya Akegarasu, who formed a friendship with the Miyazawa family. Then, by reviewing Fukkatsu-no-mae and Souringensou, Kenji Miyazawa's literary works referring to Haya Akegarasu, this paper examined why Kenji was dissatisfied with Jodo Shinshu and felt attracted to the Lotus Sutra and how such processes affected his mindset as a teacher.</p> <p>Fukkatsu-no-mae was published in spring when Kenji was graduating from Morioka Higher School of Agriculture and Forestry. By analyzing Haya Akegerasu's words quoted in the work, his thoughts were clearly characterized as an acceptance of reality with resignation. Kenji Miyazawa was dissatisfied with such thoughts, which consequently led to his conversion to the Lotus Sutra, which is oriented toward the reformation of reality. Souringensou refers to the Haya Akegarasu's tanka, that is, a short Japanese poem comprising 31 syllables. By examining the revision process and Haya Akegarasu's work, it is suggested that his tanka depicted real life as it was. In contrast, Kenji Miyazawa's literary works were transformed from tanka to free verses in spoken language and fairy tales, which were called Shinshou-sketch (Mental Sketch Modified). He regarded having questions about the structure of the world and how you see the society as an important factor in Shinshou-sketch. In conclusion, the present findings suggest that the transformation of Kenji's faith and literary works was connected to his educational thoughts, with which he entrusted the ideology of the reformation of reality to his students.</p>
Notes	論文
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN0006957X-00000091-0017

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

宮沢賢治の信仰遍歴

—作品「復活の前」「霜林幻想」における暁鳥敏をめぐって—

Kenji Miyazawa's Wanderings of His Faith: Haya Akegarasu Quoted in *Fukkatsu-no-mae* and *Souringensou*

深 田 愛 乃*

Aino Fukada

This paper aims to clarify the relationship between the conversion of Kenji Miyazawa (1896–1933) from Jodo Shinshu (the True Pure Land Sect of Buddhism) to the Lotus Sutra (*Hokekyo*) and how his educational thoughts were formed by analyzing the process of his separation from the ideology of Haya Akegarasu (1877–1954), a monk of Jodo Shinshu. Previous studies indicate that the educational thoughts of Kenji Miyazawa, a teacher of an agricultural school, were based on his faith. However, it has not been clear how his educational thoughts were influenced by the wanderings of his faith from Jodo Shinshu to the Lotus Sutra and *Nichiren-ism*. Therefore, this paper first discusses the relationship between Kenji Miyazawa and Haya Akegarasu, who formed a friendship with the Miyazawa family. Then, by reviewing *Fukkatsu-no-mae* and *Souringensou*, Kenji Miyazawa's literary works referring to Haya Akegarasu, this paper examined why Kenji was dissatisfied with Jodo Shinshu and felt attracted to the Lotus Sutra and how such processes affected his mindset as a teacher.

Fukkatsu-no-mae was published in spring when Kenji was graduating from Morioka Higher School of Agriculture and Forestry. By analyzing Haya Akegarasu's words quoted in the work, his thoughts were clearly characterized as an acceptance of reality with resignation. Kenji Miyazawa was dissatisfied with such thoughts, which consequently led to his conversion to the Lotus Sutra, which is oriented toward the reformation of reality. *Souringensou* refers to the Haya Akegarasu's tanka, that is, a short Japanese poem comprising 31 syllables. By examining the revision process and Haya Akegarasu's work, it is suggested that his tanka depicted real life as it was. In contrast, Kenji Miyazawa's literary works were transformed from tanka to free verses in spoken language and fairy tales, which were called *Shinshou-sketch* (*Mental Sketch Modified*). He regarded having questions about the structure of the world and how you see the society as an important factor in *Shinshou-sketch*. In conclusion, the present findings suggest that the transformation of Kenji's faith and literary works was connected to his educational thoughts, with which he entrusted the ideology of the reformation of reality to his students.

Key words : Kenji Miyazawa, Haya Akegarasu, modern Buddhism, Kiyozawa Manshi,

* 慶應義塾大学大学院 社会学研究科教育学専攻 博士課程1年

education and Buddhism

キーワード：宮沢賢治，暁烏敏，近代仏教，清沢満之，教育と仏教

一、はじめに

本稿の目的は、宮沢賢治（1896-1933）が真宗大谷派僧侶・暁烏敏（1877-1954）から思想的な距離をとる過程を探り、賢治における真宗から『法華経』への信仰遍歴と教育思想の萌芽との関わりを明らかにすることである。

一般的には童話作家・詩人として知られる宮沢賢治は、近代仏教の動きをリードした真宗大谷派や日蓮主義の影響を受けた教育者でもあった。宮沢家は浄土真宗の檀家であり、賢治の父・宮沢政次郎を中心に大谷派僧侶・暁烏敏や近角常観と親交を結んでいた。だが、賢治は後に『法華経』に感銘を受け、「日蓮主義」¹⁾を掲げる在家集団・国柱会に入信した。他方で、教育者としての賢治は、大正10（1921）年12月から約4年4ヶ月間、稗貫郡立稗貫農学校（後の県立花巻農学校）にて教諭を務めた。教師を自ら辞した後には、私塾・羅須地人協会を立ち上げ、土壌学から芸術、語学にわたる幅広い農民教育を行った。

従来、賢治の教育思想については、法華経的世界観に基づくものであることが漠然とは示唆されてきたが、信仰遍歴を通じた具体的な影響は明らかにされてこなかった。そこで本稿では、その初段階として、暁烏に言及した賢治の断章「復活の前」と口語詩下書稿「霜林幻想」を手がかりに、賢治は真宗のいかなる点に不十分さを感じて『法華経』に向かったのか、そしてそれが教育者としての意識の萌芽といかに関わったのかを問う。本稿では、賢治の信仰遍歴の中でも真宗から距離をとる過程に焦点をあてるが、これらの問いを通して後に彼の教育の基軸をなした『法華経』信仰の一面を仮説的に提示したい。

(一) 賢治と真宗の関係を論じた先行研究

宮沢家と浄土真宗の関係は、宮沢家の始祖とされる元禄9（1696）年没の藤井将監が浄土真宗安浄寺の門徒となってより続いてきた。賢治は、叔母・ヤギに「正信偈」（親鸞『教行信証』の偈文）や「白骨の御文」（本願寺蓮如の法語）を子守唄のように聞かされ、濃密な浄土真宗の雰囲気の中で幼少期を過ごしたと言われる。さらに宮沢家は、「精神主義」²⁾の思想を提唱した清沢満之に始まる「浩浩洞」一派に属した暁烏敏や、東京本郷の求道会館・求道学舎にて青年の感化に努めた近角常観など、親鸞思想の近代化に努めた真宗大谷派僧侶と親交を結んでいた。政次郎をはじめとする宮沢一族と彼らの交流は、書簡のやりとり³⁾や岩手花巻で開かれた仏教講習会、東京での面会を通して親密に行われており、賢治の信仰形成への影響は見逃せないものであったと考えられる。

賢治と真宗の関係をめぐる従来の論考の多くは、暁烏や近角による近代真宗の思想というよりは伝統的な真宗思想との関連に着目する傾向にあったと言える。例えば松岡幹夫（2015）は、賢治は「家庭の真宗信仰を通じて救済者信仰・現実厭離傾向、肯定的自己卑下の態度を継承したものの、仏の絶対他力にすがって現実悪を諦念する父の態度には反発を示した」[松岡2015：191]との指摘をしている。一方で、宮沢家と暁烏との関係に着目した研究としては栗原敦（1992）の論考が挙げられる。栗原は、宮沢家と暁烏の事実的な関係について、『暁烏敏日記』などの丁寧な資料調査に基づき実証的に検討している。

さらに近年は、近代仏教研究の進展に伴い、宮沢家と真宗大谷派僧侶との関係がより一層着目されつつあるが、賢治に対する思想的な影響はいまだ十分には論じられていないように見える。栗原が「清沢および浩々洞メンバーの「精神主義」と「歎異抄」理解とが重なる思想水準で講習会を準備し、親しく交友を結んだ父のもとで少年期の賢治の自我形成が行われた」が、「この意義の如何は、まだ十分に解明され尽くしていない」と示唆に富む指摘をする通りである [栗原 2010: 94]。賢治が、暁烏や近角の真宗思想ではなく『法華経』や日蓮主義でこそ満たされる思想に惹かれていったのだとすれば、前者のいかなる点に賢治が距離を感じたのかを探ることは必須であると考えられる。

そこで本稿では、特に宮沢家と親しく交わった暁烏との関わりに焦点を当てたい。最初に暁烏に焦点を絞るのは、賢治の作品において暁烏への二度の言及が見られる上、暁烏がしばしば東北を巡行しており、賢治と直接的な接触が多かったと考えられるからである。

(二) 賢治を取り巻く「精神主義」の思想

暁烏と賢治が直接的に接触した初めの機会は、「夏期仏教講習会」であるとされる。この講習会は、父・政次郎の参加する花巻の仏教四恩会と、平野立乾や齊藤新兵衛等による仏教闡明会のメンバーが重なり、花巻郊外の大沢温泉を会場に開催された⁴⁾。政次郎による暁烏宛の書簡は明治 39 (1906) 年 5 月 21 日付から確認されているが、この書簡では、夏期仏教講習会での講演依頼を暁烏が承諾したことに対するお礼が述べられている [栗原 1980: 50-51]。同年の『精神界』第 6 巻第 9 号「陸中たより」の記述によれば、暁烏は 7 月 13 日から 5 日間は花巻にて『歎異抄』講話を行い、18・19 日には盛岡の説教場にて、20 日から 7 日間は浄法寺にて講話をし、8 月 1 日からは花巻・大沢温泉にて講演を行っている。『暁烏敏日記』では、7 月の『歎異抄』講話への来会者の中に政次郎等の名が見られるが、賢治の名が出てくるのは 8 月の項である。例えば、8 月 2 日の項には「夜、政次郎長男賢治 (十一才) 同甥豊三 (九才) 直次同徒弟嘉助と、小児となりて遊ぶ」といった記述が見られる [暁烏 1976 上: 502]。

この明治 39 (1906) 年 8 月の講習会では、暁烏は清沢満之の絶筆である「我信念」をもとにした『我信念』講話を行った。本講話に関しては、明治 41 (1908) 年に金沢市崇信学舎で行われた講話記録が残されている。ここでは、金沢での記録をもとに暁烏の講話内容を辿ってみたい。講話の中で暁烏は、清沢の精神主義について「先生の信仰には、国家の事、家庭の事、自身の事、其他世の一切に就て自力の無効を信ぜらるゝといふ点がある」 [清沢 6: 316-317] とし、全てを阿弥陀如来に委ねる絶対他力の思想を強調する。そして、「現在の境遇の上に凡てを喜ぶ」 [同: 360] ことを唱え、現在をそのままに如来に任せることで、如来は「凡ての責任を引受けて救済して下さる」 [同: 396] という。さらには「諸君は如来の前に赤子になれ」とし、「赤ん坊には善悪の判断はな」く全ては「親の命によつてやるのである」から、「間違へば親が間違つた」 [同: 399-400] ということになるのだと主張する。

当時、精神主義に対しては、主観に拘泥しており社会への視座に欠けるといった批判的な評価も行われていた [碧海 2014: 27]。上記の暁烏の講話を見ても、その現在安住の思想には積極的に社会や環境を変革しようとする意志が含まれることはなく、主観主義的・無責任主義的であると批判される対象であったことが読み取れる。

では、賢治はこうした暁烏が述べるような精神主義的な思想をいかに受け止めたのだろうか。賢治が宮沢家の信仰から距離をとるようになる様子は、大正 7 (1918) 年 6 月 20 日前後の親友・保阪嘉内宛書簡 (番号 74) で以下のように述べられる。

私の家には一つの信仰が満ちてゐます^マ 私はけれどもその信仰をあきたらず思ひます。勿体のない申し分ながらこの様な信仰はみんなの中に居る間だけです。早く自らの出離の道を明らめ、人をも導き自ら神力をも具へ人をも法樂に入らしめる。〔宮沢 15 〈本文篇〉：89〕

賢治は、「みんなの中に居る間だけ」の信仰に満足せず、「人をも法樂に入らしめる」、つまり化他の信仰へと踏み出していったのであった。実際に宮沢家と暁鳥との関わりが深かったことを考えれば、「私の家」に満ちた「一つの信仰」とは、暁鳥による思想が多いに関わっていたと言える。先述した精神主義的な思想の特質を踏まえ、賢治の改宗要因のより具体的な内面に迫っていく必要があるだろう。

果たして、賢治は暁鳥の真宗思想をいかに受け止め、そこから距離をとり『法華経』へ向かったのか、そしてその信仰遍歴は賢治の教育思想形成にいかに関わることになったのか。この問題を解く鍵となるのが、賢治が暁鳥に言及した二つの作品である。

(三) 断章「復活の前」と口語詩下書稿「霜林幻想」

現在、賢治の作品上で暁鳥の名前が登場するものとして、大正 7 (1918) 年の断章「復活の前」と、『春と修羅 第二集』の口語詩「[うとうとするとひやりとくる]」の下書稿「霜林幻想」の二作品が明らかになっている〔栗原 2010：96〕。これらには、賢治における文学形式の変遷と信仰遍歴、そして教育者としての意識の萌芽という三つの時期的な重なりを探る重要な鍵が隠されていると考えられる。

まず、賢治の文学形式の変遷について、彼の文学活動は明治 44 (1911) 年の盛岡中学校 3 年生のときの短歌制作から始まった。その後、盛岡高等農林学校を卒業して同校研究生となった大正 7 (1918) 年から童話創作が始まったとされる。一方で、短歌制作は大正 10 (1921) 年を最後に下火となり、この年の 12 月、賢治は農学校教師に就き、活発な童話創作活動とともに口語自由詩の創作を始める。そして晩年には、賢治はそれまでの自身の作品の改作を含む文語詩の制作に励み、辞世の句として短歌を二首残している。

次に、信仰遍歴から見ると、賢治は明治 45 (1912) 年の盛岡中学校 4 年生のときに父宛書簡で真宗信仰を述べたが⁵⁾、翌年には曹洞宗報恩寺の僧侶・尾崎文英について参禅している。そして、大正 3 (1914) 年頃には島地大等編『漢和对照妙法蓮華経』に感銘を受け『法華経』と出会い、浄土真宗僧侶であった島地の法話を度々聞いている。それから大正 7 (1918) 年になり、『法華経』行者としての生き方を強く述べるようになる。大正 9 (1920) 年 11 月頃には国柱会に入会し、翌年 12 月から約 4 年間の農学校教師時代には、国柱会の機関新聞『天業民報』に生徒たちに歌わせた自作の歌詞を投稿している。その後、国柱会との事実的な関わりは希薄になるが、賢治は 37 歳で亡くなる間際まで『法華経』信仰を貫いた。

こうして文学と信仰の遍歴とを合わせてみると、二つの重要な時期が浮かび上がってくる。第一に、大正 7 (1918) 年、『法華経』行者としての目覚めと同時に童話創作が始まった時期である。賢治が、童話集『注文の多い料理店』「序」において、自作の童話が「あなたのすきとはつたほんたうのたべものになること」〔宮沢 12 〈本文篇〉：7〕を願う旨を述べたり、農学校の生徒に童話の読み聞かせを行ったりしたことを考えれば、彼は童話創作に教育的意義を見出していたと考えられる。いわば、『法華経』への目覚めと教育者としての意識の萌芽は、何らかの重なりが見られることが想定される。そして、断章

「復活の前」はこの年に書かれた作品であり、その重なるの内実を辿るための手がかりを持つと考えられる。

第二に、大正10(1921)年以降、賢治が国柱会に入会した翌年かつ農学校教師に就いた年であり、短歌制作が終焉した一方で、活発な童話創作活動とともに口語自由詩の創作が始まった時期である。ここで重要な意義を持つのが、暁烏の短歌に言及した口語詩下書稿「霜林幻想」である。実は、短歌から離れた賢治とは対照的に、暁烏は多くの短歌作品を創出し続けていたのであった。

これらの状況を合わせて考えれば、短歌から童話・口語詩へという文学形式の変化、真宗から『法華経』への信仰遍歴、そして教育者としての意識の萌芽という时期的な重なりは、何らかの意味を孕んだものであることが見えてこよう。さっそく次章では、「復活の前」から検討を進めていきたい。

二、大正7(1918)年の断章「復活の前」

(一)「復活の前」に見る賢治の煩悶

断章「復活の前」は、賢治が盛岡高等農林学校の友人とともに創刊した同人誌『アザリア』第5号(1918年2月20日発行)に掲載された。本断章は、「〈春の到来、進路、出自、感覚(3パート)、お釈迦さまのおまつり、父と母、青い蛇、暁烏さんの言、功利主義哲学者、怒りの火、開経偈、虚無、殺戮命令、自虐、呵責〉の15の断片」[松田2003:137]からなる。以下に、1〈春の到来〉から6〈父と母〉を引用する。

春が来ます、私の気の毒なかなしいねがひが又もやおこることでせう、あゝちゝはゝよ、いちばんの幸福は私であります

総てはわれに在るがごとくに開展して来る。見事にも見事にも開展して来る。土性調査、兵役、炭焼、しろい空等

われは古^マ著屋のむすこなるが故にこのよろこびを得たり

総ての音は斯く言へり／総ての光線は斯くふるへり／総ての人はかくよろこべり

海浜か林の中の小さな部落で私はお釈迦様のおまつりをしたい、御菓子をつつゝ、又はとれるだけ人人のとるにまかせつゝうまい、冷めたいのみものを人々の飲むに任せまた釈迦像のあたまから浴びせるに任せ、

私はさびしい、父はなきながらしかる、かなしい、母はあかぎれして私の幸福を思ふ。私はいくぢなしの泣いてばかりゐる、あゝまっしろな空よ、／私はあゝさびしい[宮沢16上〈補遺・資料編〉:283-284]

先行研究の多くは、本断章が発表されたのが父との間で高等農林卒業後の進路を巡って対立が起きていた時期である点に着目し、本文の「土性調査、兵役、炭焼」や「古着屋のむすこ」という言葉を父との

往復書簡と重ね合わせて以下のことを指摘する⁶⁾。

父と子との進路を巡る対立は中学卒業後から始まった。一旦は高等農林学校へ進学することで棚上げになったこの問題であったが、今度は高等農林卒業を控え無視できないものとして再燃したのであった。当時の慣習として、長男の賢治が家業の質屋兼古着屋を継ぐことは当然のことではあったが、貧しい農民を相手にした商売に反発心を抱く賢治にとってそれは避けたい選択であった。他方で「土性調査」は、高等農林学校の関教授から依頼されており卒業後も研究生として残るといふ妥当な解決策であったが、学生として残れば「兵役」を免除されることになる。父にとっては、息子が徴兵から逃れることは望むべき話であったが、真面目な青年であった賢治はそれを嫌った。また、「炭焼」は賢治が生業の一つとしてこの頃考えていたものであった。ところが、父には賢治の「土性調査」「兵役」「炭焼」等の逡巡は理解されず、あくまでも父は賢治が家業を継ぐことを期待したのであった。

そこに並行して、宗教の問題が取り上げられたのである。賢治は、大正 7 (1918) 年 2 月 2 日付の父宛書簡 (番号 44) で、以下のように『法華経』を奉ずることを述べている。「願はく^マ誠^マに私の信ずる所正しきか否や皆々様に御判断下され得る様致したく先づは自ら勉励して法華経の心をも悟り奉り働きて自らの衣食をもつ^マくのはしめ進みては人々にも教へ又給し若し財を得て支那印度にもこの経を広め奉るならば誠に誠に父上母上を初め天子様、皆々様の御恩をも報じ折角御迷惑をかけたる幾分の償をも致すこと、存じ候」[宮沢 15 〈本文篇〉: 47]。さらに、2 月 23 日付の父宛書簡 (番号 46) では、「万事は十界百界の依て起る根源妙法蓮華経に御任せ下され度候」「何卒折角の御心配には候へども私一人は妙法蓮華経の前に御供養願上候」[同: 49-50] と、賢治はさらに『法華経』行者としての態度を強めている。

(二) 暁烏主筆雑誌『汎濫』との関係

では、こうした職業と宗教を巡る賢治の煩悶に暁烏の存在はいかに関わるのだろうか。以下に、「復活の前」における 7 〈青い蛇〉と 8 〈暁烏さんの言〉を引用する。

黒いものが私のうしろにつと立ったり又すうと行ったりします、頭や腹がネグネグとふくれてあるく青い蛇がゐます、蛇には黒い足ができました、黒い足は夢のやうにうごきます、これは竜です、とうとう飛びました、私の額はかぢられたようです

暁烏さんが云ひました「この人たちは自分の悪いことはそのけで人の悪いのをさがし責める、そのばちがあたってこの人たちは悲憤こう慨するのです」^マ[宮沢 16 上 〈補遺・資料編〉: 283-284]

この暁烏の言葉に関しては、唯一、石川真理子 (1991) が「このくだける全部が…賢治ひとり責めたてるものとして存在していると感じられてならない」[石川 1991: 43] と言及しているが、その具体的な内容には触れていない。

そもそも、暁烏はこの言葉をどのような文脈で述べ「この人たち」とは誰を意味したのか、また賢治はどのような場でこの言葉を耳にしたのだろうか。「復活の前」が発表される以前、賢治と暁烏の直接的な接触があったと考えられるのは大正 6 (1917) 年 5 月のことである。この月、暁烏は盛岡から花巻へと巡回し、13・14 日は花巻にて⁷⁾、7 日には盛岡の「高等農林学校」にて講話を行っている⁸⁾。賢治は、高等農林入学以来、寄宿舎に入った後は下宿していたため、日曜日と月曜日にわたって行われた花

巻での講演よりは高等農林学校で暁烏の講演に触れた可能性が高いと考えられる。ただし、同年の『暁烏敏日記』は残されておらず、暁烏が投稿していた雑誌等にも彼の講演記録は残されていない。

そこで、この時期に暁烏が著した文章を辿っていくと、「復活の前」の言葉に近似したものが暁烏主筆雑誌『汎濫』⁹⁾ 大正7(1918)年1月号(1917年12月27日発行)に掲載されていることが確認された。大正5(1916)年10月12日付の暁烏宛政次郎書簡には「雑誌度々難有奉存候」とあり、宮沢家に『汎濫』と思われる雑誌が送付されており、賢治にとってそれは身近な雑誌であったことがわかる。該当箇所は随筆「説教師」に見られる。

彼は自分が悪いことをしたことがないといふてゐます、そうして彼は他人の上に悪いことを常に見出してゐます。／この罰によりて彼は常に世を憤り人を呪ふてゐます。[『汎濫』1918.1:2]

暁烏の随筆には、こうした明確な対象が判然としない「彼」への言及がしばしば見られるが、これは暁烏本人を第三者的に示したものと考え得る。「説教師」を含む暁烏の随筆は、単著『独立者の宣言』(1921年)にまとめられており、その「はしがき」には以下のようにある。「一々の文章には、所謂系統たててはゐないが、私といふ者の衷心がいかに育つて行くかといふ、この私自身の魂が根帯となつてゐるのであるから、始終一脈の気が溢れてをるのであります」[暁烏1921:2]。暁烏の随筆は「深い内省」[同]そのものであり、随筆中の「彼」は、暁烏自身と切り離して読むことのできない存在であるとわかる。

さらに、このことは「説教師」の冒頭部分の以下の文章からも想定することができる。

C. 君があんまり聴衆を感化しやう、わからせやうと焦るから物議が起るのではないか。君が静に内省して君自身の事を語つてゐたらめつたと物議の起るやうなことはあるまい。どうですか。

B. 考へてみると、そんな傾向もあります。やはり私は説教者なんですね、布教使なんですね。いやなことです、恐ろしいことです。お寺に生まれた時に呪はれた私なのかと思ふと浅ましく泣きたくになります。[『汎濫』1918.1:2]

ここからは、Bは説教師としての暁烏自身、あるいは暁烏を代表とした僧侶を表しており、「説教師」は僧侶である暁烏が抱える矛盾を問うものとなっていることが窺える。暁烏は後年、本山の布教使辞退届を提出した日の日記で「大体私は布教使とか布教といふ言葉さへいやなのです」[暁烏1976下:633]と述べるように、布教使や説教師というあり方に疑念を持っていたのであった。

そして、「復活の前」における暁烏の言葉と対応する箇所直前には、「彼」に対する以下のような呵責が見える。

彼はあんまり事情に通じすぎてゐます故に彼は何事もできないのです。…見えすぎて、突破のできぬ現実停立の彼は、一歩で未来の世界の開拓にふみこむ力と勇とがないのであります。／私は勇敢なる愚者の出現をまつてゐます。新世界は事に聡明な人に導かれずして愚者によつて導かれてをります。[『汎濫』1918.1:2]

ここでは、「彼」への呵責から「私」が勇敢なる患者の出現を待つという表現に変わるように、「彼」と「私」とが重ね合わされる様子を読み取れる。

つまり、随筆「説教師」では、「彼」という言葉で間接的に表された暁烏による、「未来の世界」や「新世界」の開拓には踏み込めない「現実停立」の姿勢にありながら、自身の悪を顧みずに他人に悪い点を見出そうとしていることへの深い自覚が述べられているのである。しかし、先述した『『我信念』講話』でも確認されたように、精神主義の思想においてはそうした自覚を打破する方向に進む選択はなされない。暁烏『歎異鈔講話』で述べられるごとく、「ただ人力の小さなことをあやまりはてて、仏の救いに帰するよりほか」はないのである〔暁烏 1981 版：146〕。

(三) 「精神主義」からの離反と童話創作

そこで「復活の前」に戻ると、「この人たちは自分の悪いことはそのけで人の悪いのをさがし責める、そのばちがあたってこの人たちは悲憤こう慨するのです」と、非難される対象は暁烏を指す呼称ではなく、三人称複数形で表記されている。ここからは、賢治による暁烏への非難は積極的には読み取れない。むしろ「復活の前」の流れに沿えば、自己（「彼」）を皮肉に言う暁烏に、賢治が宗教や進路のことで身を定めかねる賢治自身を重ねる口調を読み取ることができる。

しかし、賢治は自己批判にとどまることはなく、現実を打破していこうという思いを胸に秘めていた。以下、9〈功利主義哲学者〉から 15〈呵責〉までを引用する。

功利主義の哲学者は永い間かゝって自分の功利的なことを内観し遂げました、これ実に人類の為におめでたいことではありませんか

(今人が死ぬところ) 自分の中で鐘の烈しい音がする。何か物足らぬ様な怒ってやりたい様な気がする。その気持ちかぼうと赤く見える。赤いものは音がする。だんだん動いて来る。燃えてゐる、やあ火だ、然しこれは間違で今にさめる。や音がする、熱い、あこれは熱い、火だ火だ ほうとうの火、あついほうとうの火だ、あゝこゝは火の五万里のほのほのそのまんなかだ。

無上甚深微妙の法は百千万劫にも遭遇したてまつることかたし。われいま見聞し受持することを得たり。ねがはくは如来の第一義を解し奉ん

なんにもない、なあんにもない、なあんにもない。

戦が始まる、こゝから三里の間は生物のかげを失くして進めとの命令が出た。私は剣で沼の中や便所にかくれて手を合わせる老人や女をズブリズブリとさし殺し高く叫び泣きながらかけ足をする。

私は馬鹿です、だからいつでも自分のしてゐるのが一番正しく真実だと思つてゐます、真理だなんとよそよそしくも考へたものです

なみだなくして人を責めるのはもとめるのです。〔宮沢 16 上〈補遺・資料編〉：283-284〕

「自分の中で鐘の烈しい音」がし「何か物足らぬ様な怒ってやりたい様な気」が湧き上がる描写に続く「無上甚深微妙の法…」の断片は、日蓮宗の「開經偈」である。開經偈とは、経巻を読誦する前に唱える偈文であるが、最後の一文が「如来の第一義」となっていることより日蓮宗の開經偈を意識したものであることがわかる。他宗派では「如来の真実義」とするのに対して、日蓮宗では第一のすぐれた真実の教えである『法華経』を根本経典とするために「如来の第一義」とするのである¹⁰⁾。

自身の憤りに続く断片にあえて日蓮宗の開經偈を用いた点からは、この頃の賢治が自らの矛盾を悲しみ憤る真宗的態度から脱し、現実社会での実践を重視する日蓮的態度へと向かおうとくすぶっていたことが窺える。賢治は、大正3(1914)年頃に島地大等編『漢和对照妙法蓮華経』と出会った際に、娑婆世界(仏国土に対するこの世界)における釈迦の菩薩行を説いた「如来寿量品第十六」(「品」は章を示す)に特に感銘を受けたと言われる。本品では、釈迦が遙か過去に悟りを得ていながら、過去における菩薩(仏になるため悟りを求める一方、衆生を救おうと願って修行を重ねる者)としての修行をいまだ完成させておらず、娑婆世界において説法教化してきたことが説かれている。『漢和对照妙法蓮華経』の巻末に付された本品に対する解説では、「伝道化物の本国土は現前の娑婆を中心と為す」[『法華大意』島地1914:60]と説明されており、賢治もその大意を掴んでいたことだろう。

賢治は、童話や書簡でも如来寿量品の名前や偈文を登場させており、こうした教えを説く本品を重視し続けていたと考えられる。もちろん、大等による『法華経』から進んで日蓮的態度に接することとなった過程やその内実については、また別に論じる必要がある。しかしながら、賢治が『法華経』や日蓮的態度に惹かれた理由において、「みんなの中に居る間だけ」(書簡番号74)で「現実停立」(暁烏「説教師」)な真宗信仰とは対照的に、現実社会での菩薩行を重視する教えが重要な要素をなしていたと推測できる。

そして、『法華経』や日蓮的態度に向かおうとする賢治の気概は、先に引用した2月2日付の父宛書簡(番号44)の中で、「或は更に国土を明るき世界とし印度に御経を送り奉ることも出来得べくと存じ候」[宮沢15〈本文〉:47]と記されている。賢治が「国土」という言葉で何を指し示したのかについては検討が必要であるが、『法華経』信仰に伴って、自己の内観に留まらずにより良い世界や社会に向けた実践への視座を獲得していく様子が窺える。さらに、松田司郎(2003)は、賢治が彼の生きた時代に対抗するものとして「新文明の建設」を唱えたことを指摘している。以下は、大正7(1918)年3月20日頃の親友・保阪嘉内宛書簡(番号50)である。

私共が新文明を建設し得る時は遠くはないでせうがそれ迄は静に深く常に勉め絶えず心を修して大きな基礎を作つて置かうではありませんか。…どうか諸共に私共だけでも、暫らくの間は静に深く無上の法を得る為に一心に旅をして行かうではありませんか。やがて私共が一切の現象を自己の中に抱蔵する事ができる様になつたらその時こそは高く高く叫び起ち上り、誤れる哲学や御都合次第の道徳を何の苦もなく破つて行かうではありませんか。[宮沢15〈本文篇〉:58-59]

暁烏が「新世界」(「説教師」)の開拓に踏み込めない自己を嘆きつつも受容して終えるのに対して、賢治には「新文明の建設」を唱える気概があったのであった。

ところで、大正7(1918)年に始まった賢治の童話創作活動が、こうした新しい世界や文明のための一手段であったことは、童話集『注文の多い料理店』広告文に示唆されていると言えよう。賢治は「こ

の童話集の一例は実に作者の心象スケッチの一部である」として、その特色を以下のように述べる。

- 一 これは正しいもの、種子を有し、その美しい発芽を待つものである。而も決して既成の疲れた宗教や、道德の残澤を色あせた仮面によつて純真な心意の所有者たちに欺き与へんとするものではない。
- 二 これらは新しい、よりよい世界の構成材料を提供しやうとはする。けれどもそれは全く、作者に未知な絶えざる警異に値する世界自身の発展であつて決して畸形に涅槃あげられた煤色のユートピアではない。[宮沢 12 〈校異篇〉：10-11]

以上のように、大正 7 年の賢治は、暁鳥の精神主義的態度に安住せず日蓮的な『法華経』行者としての生き方に目覚めつつあった。そして、それと重なり合うように開始された童話創作活動は、「新しい、よりよい世界」の構成材料を子どもたちに提供する一つの手段でもあったのである。

三、昭和 5 (1930) 年前後の下書稿「霜林幻想」

(一)《岩手山麓晩秋紀行詩群》の成立過程

『春と修羅 第二集』における晩秋の岩手山麓を舞台とした作品、329 番「〔野馬がかってにこさえたみちと〕」と 330 番「〔うとうとするとひやりとくる〕」¹¹⁾ は、その逐次稿の変化が大きいことで注目されてきた。暁鳥の歌に言及した「霜林幻想」は、330 番「〔うとうとすると…〕」の下書稿 (三) であり、下書稿 (二) の余白部分に書き込まれたものである。木村東吉 (1995) は、逐次稿とともに「〔野馬がかってに…〕」と「〔うとうとすると…〕」が《岩手山麓晩秋紀行詩群》を形成していると見て、その変化を追っている。『春と修羅 第二集』は、賢治が農学校教師時代の後半 2 年間に創った作品が収められているが、その後大きく 3 回にわたって編集し直されている。木村の整理によれば、「霜林幻想」は昭和 5 (1930) 年～同 7 (1932) 年頃に書かれたものと推定される。

では実際に、330 番「〔うとうとすると…〕」の変化を辿ってみたい。下書稿 (一) は「柏林のピクニック」と題され、「(いゝか、周天は連亘す浄明の幡) / (無韻!) / (十方無韻蒼亦蒼)」[宮沢 3 〈校異篇〉：354] というように、二人の人物が柏林でピクニックをしながら漢詩問答を行う様子が描かれている。下書稿 (二) は「初冬幻想」と題され、(一) の漢詩問答を引き継ぎながら、加えて天狗問答が行われる形となっている。そして、下書稿 (三) は「霜林幻想」と題され、漢詩問答の素材を引き継ぎつつも漢詩を連歌に取り替えている。この連歌の中に暁鳥への言及が見られる。該当箇所を引用する。

- ……まあいゝ、柏の樹みなかさがさと鳴りそめて
 ……おとめは遠く去りにけるかな
 おいおい何だそれは
 ……何でもない 続けただけさ
 ……本気でないな
 おとめは遠くなりてけるかな
 まるで暁鳥さんの歌だ
 てけるかなとはなんだ [宮沢 3 〈校異篇〉：358-359]

さらに、下書稿（四）は題を欠くが、冒頭部の連歌が削られ天狗問答のみが描かれている。下書稿（五）では、天狗問答の素材を引継ぎつつ、それまでの下書稿から大幅に内容が差し替えられている。その大意について木村は、「長期滞在者による村人に関する噂話の形で、村の若い男女の仲、密造酒、娘の身売り、詐欺といった村の内部の問題にもふれて」おり、「詩人は歌に遊ぶことをやめて農村社会の内部に踏み込んでいる」としている〔木村 1995：8〕。一部を以下に引用する。

（何でせうメチル入りの葡萄酒もって／寅松宵に行ったでせう）／（おまけにちゃんと徳利へ入れて／ほやほや〔爛〕をつけてみた／だがメチルではなかったやうだ）／…／（もっともゲルベアウゲの方も／いっぺん身売りにきまったところを／やっとなあしてゐるさうですが）／（あんまり馬が廉いもなあ）／（ばあさんもゆふべきのこを焼いて／ほくにはいろいろ口説いたですよ／何ほ何食って育ったからって／あんまりむごいはなしだなんて）〔宮沢 3 〈本文篇〉：147-148〕

木村は、詩人の目線が農村社会の現実把握へと移ったことについて、《岩手山麓晩秋紀行詩群》の前後をなす詩群の逐次稿の変化と合わせて考察を行っている。例えば、後ろの詩群では、一次清書稿ではファンタジックなイメージが描かれるのに対して、二次清書稿段階では「北国の農村に襲いかかる冬の天象のイメージが、社会情勢のアナロジーをとまな」って再構成されたものとなっている〔木村 1995：14〕。こうした流れの中に、下書稿（二）「初冬幻想」や下書稿（三）「霜林幻想」が置かれれば、「インテリ青年の貴族的な清遊」〔同〕として詩集の文脈から浮いてしまう。詩群全体の改稿過程を見れば、詩人の目線が農村社会の現実へと向かう方向へと改稿されていったことがわかるのである。

（二）暁烏個人雑誌『願慧』における「山遊びの記」

では、詩人の目線が社会的現実へ向かうのに伴い結果的に削除された歌の戯れの中で、「暁烏さんの歌」がいかなる意味を持つのかを検討していきたい。まず問題になるのは、形式か内容のいずれの面において「まるで暁烏さんの歌だ」と表現したのかという点である。一つ目に考えられるのは、「てけるかな」という言葉遣いによる形式面であるが、「霜林幻想」の推敲過程は以下のようにになっている。

おとめは遠くなり〔に→て〕けるかな／〔(ナシ)→まるで〕暁烏さんの歌〔みたい→(削)〕だ〔な→(削)〕／〔(ナシ)→てけるかなとはなんだ〕〔宮沢 3 〈校異篇〉：358〕

ここからは、賢治が「てけるかな」に改め、かつ「てけるかなとはなんだ」という言葉を入れる以前から、「暁烏さんの歌みたいだな」という言葉が差し込まれていたことが想定できる。よって、「てけるかな」という言葉遣いでもって類似を意味したとは断定し難い。

そこで、内容面での類似について検討するため、実際に「霜林幻想」が書かれる昭和 7（1932）年頃までの暁烏の短歌を辿っていく。「霜林幻想」の「柏の樹みなかさがさと鳴りそめて／おとめは遠く去りにけるかな」を手がかりにすれば、「柏の樹」や「おとめ」という語、「かさがさ」という擬音、「遠く去りにけるかな」という描写が類句発見のための手立てになる。暁烏が短歌を発表したのは、自身が関わった雑誌や単著であり、その一部分は『暁烏敏日記』にも収められている。だが管見の限り、それらの中には「霜林幻想」の歌の描写や言葉遣いを用いた類句を確認することはできなかった。

しかしながら、暁鳥による個人雑誌『願慧』第7年6月号（1928年6月1日発行）には、「山遊びの記」と題した記録とその際に詠まれた短歌が掲載されており、内容的に近しいものが見られる。昭和3（1928）年8月12日付の暁鳥宛政次郎書簡には、「願慧によりて御消息拝見御健勝何よりと喜入申候」[栗原1980:107]とあり、宮沢家に本誌が送られていたことがわかる。『願慧』は、大正11（1921）年に創刊した『葉王樹』を大正14（1925）年に改題発行したもので、『汎濫』から引き続き宮沢家に送付されていたと考えられる。

この「山遊びの記」には、「五月三日、家内中で金澤の郊外から犀川の上流の方へ山遊びに行くことにした」として、暁鳥が家族や村の友人等とともに山遊びに行った記録が記されている。そして、家に帰宅して「筍をたべながら次の歌が生まれ出た」と暁鳥や友人による複数の短歌が掲載されている。その中に、暁鳥の歌として「女等は松の林をわけ入りてわらびつみつゝ見えずなりけり」とある。もちろん、この歌のみから「霜林幻想」の歌との一致は指摘し難いが、「詩人（歌人）による山遊び」や連歌ではないものの友人同士で歌を詠み合うという場面設定を考えれば、賢治がここから題材案を得たとも考え得る¹²⁾。

そしてより一層注意されたいのは、「山遊びの記」短歌群に見られるような暁鳥の歌の性格である。暁鳥の短歌には、「女等は松の林を…」に象徴的なように、その場で見た情景や体験を写實的に詠むという性質が見られる。例えば暁鳥は、昭和2（1927）年9月に花巻・大沢温泉に行った際に、「門を入れればさくらもみちのはらはらと夕べの風にまうてをるかな」[暁鳥1927:82-83]といった歌を詠んでいる。また、暁鳥短歌には自身の感情を率直に詠みあげるといった特徴が見られる。例えば、暁鳥が母を亡くした際に読んだ短歌群「母を憶ふ歌」には、「楽みにも苦しみにもあらず独りゐておかあさんと呼びなき暮すかな」「わが上に母のいのちの生きればとよくしりおれどされど淋しき」[『葉王樹』1924.4:5]などが見られる。こうした暁鳥の短歌は単著のみならず雑誌上に掲載され続けていたため、賢治もそれをしばしば目にし、その性格を把握していたことと考えられる。

（三）暁鳥短歌と「心象スケッチ」

さて、賢治が目にした暁鳥短歌の性格を確認すると、330番「[うとうとすると…]」の改稿過程における「暁鳥さんの歌」の意味が浮かび上がってくる。詩群全体の改稿過程に見られたように、賢治の詩は単なる詩人の清遊を描くものではなく農民生活の実態へと視線を向けたものに変化していた。そして、「まるで暁鳥さんの歌だ」という言葉が示すような賢治にとっての暁鳥の歌とは、実際に「山遊びの記」に見られたように詩人（歌人）の清遊に近く、体験や情景を見た通りに記録したものであった¹³⁾。

ここで振り返るべきは、短歌を離れて「心象スケッチ」と称する童話や口語自由詩に移行したという賢治の文学形式の変遷である。もともと、賢治の短歌の中には、「心象のそのときどきの断片であり、それ自体で完結」しておらず「後年の作の原質」であるとの評価がなされる作品もあった[中村2005:264]。例えば、大正6（1917）年の短歌には、「七つ森／青鉛筆を投げやれば／にはかに／機嫌を直してわらへり」といったものがある。今野寿美（1995）が述べるように、短歌形式からの移行に対する「おおかたの研究者」の見方とは、「短歌によって文芸に目覚めた青年が…短歌形式には収まりきれない文学的欲求の大きさに、ほかのジャンルに移行していったという構図」というものであった[今野1995:28]。

しかし、ここに暁鳥短歌の存在を差し挟んでみると、賢治の文学形式の変化は単なる口語や自由詩と

いう形式上の変化にとどまらない別の様相を見せてくる¹⁴⁾。ここで、そもそも賢治が短歌から離れて目指した「心象スケッチ」とは何であったかを確認しておきたい。

まず賢治が心象スケッチに言及したものとして、大正14(1925)年2月9日付の森佐一宛書簡(番号200)が挙げられる。賢治は、『春と修羅』やこれまでに「書き付けてあるもの」は「到底詩ではありません」として、それらについて以下のように述べる。

私がこれから、何とかして完成したいと思って居ります、或る心理学的な仕事の仕度に、正統な勉強の許されない間、境遇の許す限、機会のある度毎に、いろいろな条件の下で書き取って置く、ほんの粗硬な心象のスケッチでしかありません。私はあの無謀な「春と修羅」に於て、序文の考を主張し、歴史や宗教の位置を全く変換しやうと企画し、それを基骨としたさまざまな生活を発表して、誰かに見て貰ひたいと、愚かにも考へたのです。[宮沢15〈本文篇〉:222]

この書簡からは、心象スケッチとは、「或る心理学的な仕事の仕度」¹⁵⁾であり、「歴史や宗教の位置を全く変換しやう」という目的のもと書かれたものであったことがわかる¹⁶⁾。

次に、賢治が残した「詩法メモ8」にも、「感想手記叫び、／心象スケッチに非ず／排すべきもの比喩」[宮沢13下〈本文篇〉:274]との重要な記述が見られる。これは、「東北砕石工場花巻出張所」用箋の裏に記されており、昭和7(1932)年前後のものと考えられている。いわば、心象スケッチと「感想手記 叫び」を隔てるものとは、「歴史や宗教の位置」を変換することを目的とする点にあったと言える。さらに、賢治が詩のあり方について述べた羅須地人協会での講義「地人芸術論」を見ておく。ここで賢治が主に取り扱うのは「労農詩」であり、心象スケッチとの関連は判然とはしないが、賢治における詩に関する理想を知ることができる。以下は、協会員であった伊藤忠一による講義記録「労農詩論三講」である。

- 詩人とは…常に來たるべき文化の先陣に立つものにして、個人によりて理想異なるもので有る。／
- 新時代の詩の特徴・健全でなければいけない。(希望、勃興の氣持、不正に対する反抗、社会的にして生産的で有ること。)[宮沢16上〈補遺・資料篇〉:202]

このように見てくると、賢治が短歌から離れて創造した「心象スケッチ」では、「歴史や宗教の位置」の変換といった世界の構造への問いかけや、「來たるべき文化」への眼差し、社会的な意識が不可欠の要素をなしていたことがわかる。それに対して、賢治の捉えた暁烏の短歌を振り返れば、それは「心象スケッチに非ず」とされた「感想手記 叫び」に位置付けられるものであると言える。

賢治が暁烏の歌の性格に意識的であったとすれば、賢治にとっての短歌は、内観主義的な精神主義の思想を背景とした、自身の主観に基づく体験や感情をただ記すという姿勢を想起させるものであったのではないか。そして、賢治における文学形式の変遷と『法華經』信仰の目覚めは、暁烏の思想には見られなかった「世界や社会への眼差し」を重要な基点として重なり合っていると考えられよう。

四、おわりに—『法華經』、心象スケッチ、教育へ

以上、作品「復活の前」と「霜林幻想」を手がかりに、賢治は、「新世界」の開拓に踏み込まず「現実

停立」(暁烏「説教師」)であるような暁烏の精神主義的な姿勢に不十分さを感じ、やがて『法華経』や日蓮主義で重視される現実社会への眼差しに目覚めていったことが見えてきた。そして、そうした眼差しの獲得とともに、「新しい、よりよい世界」(『注文の多い料理店』広告文)の構成材料を子どもたちに提供する一つ的手段として童話創作が開始されたのであった。童話創作活動を教育者としての意識の萌芽と見たとき、まだそれが自覚的ではなかったとしても、賢治にとって教育が信仰と結びつくものとして意味を持ちつつあったと捉えることができる。

ただし、真宗から『法華経』へと向かったその信仰遍歴は単線的に描けるものではない。賢治は、鳥地大等編『漢和対照妙法蓮華経』に出会う前後にも、前述したように曹洞宗の尾崎文英のもとで参禅したり、真宗の僧侶であった大等の「歎異鈔法話」を聞きに赴いたりしている。暁烏への言及が大正7(1918)年と昭和5(1930)年の離れた時期に見られるように、真宗や他の信仰に対する視線を持ちながら、徐々に賢治自身の『法華経』を中心とした信仰体系が象られていったものと考えられる。

そして、大正7(1918)年の『法華経』行者としての目覚めと童話創作の開始が時期的に重なるとは言っても、それが大正10(1921)年末に始まる農学校や羅須地人協会時代以降の教育活動にすぐに直結するわけではない。賢治が農学校教師となったのは、自らの志望というよりは、偶然に舞い込んできた話を引き受けたという受動的理由によるものであった。実際に、前述した高等農林学校卒業前の父とのやりとりの時点において、賢治は家業を継ぐことに対する反発は見せたものの農民教育や農村活動に関する言及は行っていない。賢治の『法華経』信仰が具体的な農村での活動へと結実していくのは、農学校教師という職業に就き、農村の現実を目の当たりにするという経験を通してのことであると推測できる。このことは、賢治の『法華経』信仰そのものが、国柱会への入会といった経験を経て変容していった可能性とともに考慮する必要がある。

すなわち、精神主義から距離をとる過程において可能となった、自己の内観に留まらない世界や社会への眼差しの獲得は、農学校での経験を通してより実際的な意味付けがなされていったと見ることができるだろう。農学校や羅須地人協会における賢治の教育実践は、東北農村に生きる人々の生活の向上を目指し、さらには新たな農村のあり方を構想したものであった。そして賢治は、新たな文化・文明の創造への志向を自身の中で完結させることなく、童話の読み聞かせや『春と修羅』の贈呈などを通して、子どもたちや農民に授けることを目指した。そうした教育者としての賢治の思いは、「生徒諸君に寄せる」¹⁷⁾に明瞭に示されている。

諸君はこの時代に強ひられ率ひられて／奴隷のやうに忍従することを欲するか／むしろ諸君よ 更
にあらたな正しい時代をつくれ／宙宇は絶えずわれらに依って変化する／汐や風、／あらゆる自
然の力を用ひ尽すことから一足進んで／諸君は新たな自然を形成するのに努めねばならぬ [宮沢4
〈本文篇〉: 207]

こうした教育思想が芽生えてくる基底には、暁烏らによる精神主義から現実社会での実践重視の『法華経』や日蓮主義への遍歴が関わっていたと言える。そして、賢治が『法華経』のみならず日蓮主義(国柱会)に惹かれた理由には、現実を改革することで新たな世界や文明を創造しようとする志向によるものであったと考えられる。

しかし、賢治の真宗に対する反応は、近角常観との関係も含めて今後より精緻に検討する必要がある

る。そして次なる課題として生まれたのは、賢治が教育や文学を通して新たに築こうとした文明や世界の内実とはいかなるものであったのか、という問題である。この問題に関しては、賢治の『法華経』信仰の変容や、仏法の優越を説きつつも国体論的教説を中心とした国柱会との関係を緻密に辿る過程が必要となるだろう。

注

- 1) 智学は日蓮主義について、日蓮の教義を「純信仰の立場よりも広い意味に、思想的又は生活意識の上にもまで用ひようとして、之を一般化して日蓮主義と呼称した」[田中智学 1934『日蓮主義新講座・概論』師子王文庫：13]としている。
- 2) 清沢は、「精神主義」について「其第一義は、充分なる満足の精神内に求め得べきことを信ずるにあり」[暁鳥敏・西村見暁編 1953『清沢満之全集 6』法蔵館：5]と定義している。ただし、本稿で主に登場する「精神主義的な思想」とは、清沢自身の思想ではなく、暁鳥による清沢の思想の独自の解釈を意味する。清沢と暁鳥における思想の相違については、山本伸裕 2011「真宗的生命観とその思想的展開—暁鳥敏の事例」『死生学研究』(16) 74-100 頁など。
- 3) 岩田文昭・碧海寿広 2010「宮沢賢治と近角常観—宮沢一族書簡の翻刻と解題」『大阪教育大学紀要』第 1 部門第 59 巻第 1 号、121-140 頁、大阪教育大学や、栗原編 (1980)。
- 4) 花巻夏期仏教講習会に関しては、栗原敦 (1985) や『新校本宮澤賢治全集』年譜篇を頼りに、『岩手毎日新聞』『岩手日報』を参照した。夏期講習会が新聞記事の記録によって確認できるのは、明治 32 (1899) 年からである。講習会は、当初は軍医平野立乾、弁護士照井庄六など町の名士が中心になって「夏期休業中帰郷せる学生の為め」の「學術講習会」として開催された [『岩手毎日新聞』1899.7.25：1 面、8.4：2 面、8.11：2 面]。明治 36 (1903) 年の第 5 回からは完全に仏教講習会となったが、これを花巻の仏教四恩会の若手実業家・求道者たち有志が支え、やがて主催するようになっていった。政次郎の尽力は第 4 回頃から始まったと見られており、大正 4 (1915) 年の『岩手日報』には政次郎が講師交渉、接待その他経費の大部分を負担して感謝されている旨が報じられている。
- 5) 「小生はすでに道を得候。嘆異抄の第一頁を以て小生の全信仰と致し候 もし尽くを小生のものとなし得ずとするも八分迄は得会申し候 念仏も唱へ居り候」(書簡番号 6) [宮沢 15 (本文篇)：16]。『嘆異抄』は室町期の蓮如以来一般門徒には禁書扱いで広く知られることはなかったが、明治になり暁鳥や近角によって世間一般に広められていった。『暁鳥敏日記』には、明治 39 (1906) 年の仏教講習会の際に、暁鳥が参会者からの質問に対して『嘆異抄』の一節をもって回答する様子が記されている。賢治の『嘆異抄』理解には、暁鳥の紐解きが大きく影響していたと言える。
- 6) たとえば石川 (1991) や松田 (2003)、森 (1999) など。
- 7) 暁鳥主催の雑誌『汎濫』11 号 (1917 年 6 月 20 日発行) の「東京にて」という記事では、「十四日には花巻にまゐりました。宮澤政次郎、同直治、齋藤宗次郎氏等の舊知の人々に四年ぶりで逢ふたのはうれしかった」とある [同：6]。また、暁鳥宛の政次郎書簡 (1917 年 5 月 8 日付) では、「暁鳥敏師来る」という広告ビラに載せる日時の調整の相談を持ちかけている様子が窺える。これらから、暁鳥が宮沢家に歓待され、花巻で仏教講話を行った様子が想像される。
- 8) これは、『汎濫』10 号 (1917 年 6 月 5 日発行) の「盛岡にて」という 5 月 7 日付の便りで、「今日は高等農林学校に行き、夜は物産館で講話をします」と述べていることからわかる。また、『岩手日報』の 1917 年 5 月 5 日の 2、3 面の欄外には「暁鳥敏師来盛」という小さな記事がある。ここには、「来盛の上は花祭高等農林学校並に佛教婦人会□ (一字判読不明) 出演の予定なり」とあり、暁鳥が高等農林学校と仏教婦人会にて講話を行う予定であったことが記されている。
- 9) 藤原鉄乗、高光大船らが発行していた雑誌『旅人』に暁鳥敏を加えて改題、46 部判 8 頁の『汎濫』を大正 6 年 1 月に創刊した (月 2 回、金沢市の愚禿社より発行) [栗原敦 (1980) 参照]。
- 10) 島地大等編『漢和对照妙法蓮華経』冒頭の開経偈は、「如来の真実義」とする浄土真宗で読まれる偈文となっている。また、賢治が日蓮宗の開経偈を引くのは「復活の前」が初めてではなく、賢治は前年に発表した「柳沢

という作品でも引いている。すなわち、賢治は大正 6 (1917) 年頃には『法華経』からさらに進んで日蓮系の何らかの著作や教義に接していたことが推定される。

- 11) 「330」などの作品番号は賢治本人が付したものである。
- 12) 「山遊びの記」に記された短歌群は、暁烏の著作集「にほひぐさ」の一篇『地球をめぐるて』(1930 年, 香草社)にも掲載されている。
- 13) 本稿では両者の短歌の文学史的事項には立ち入らないが、以下の点を指摘しておく。賢治の短歌は、途中から三行四行などの様式で書かれていることから石川啄木の影響が示唆されてきた。一方で、暁烏は正岡子規の短歌会に出入りし、伊藤左千夫や斎藤茂吉とも交流があった。なお、暁烏 1930『地球をめぐるて』「編輯の後」には、国学者であり桂園派の歌人であった高橋富兄の手ほどきによって歌を作り始めた旨が記されている。
- 14) なお、賢治が晩年に励んだのは文語詩の創作であり、絶筆として遺したのは二首の短歌であった。賢治は、「定型律および文語に執着を見せながら、短歌から離れていった」[今野 1995: 29] のである。
- 15) 「或る心理学的な仕事」における「心理学」が果たして何を意味するのかについては、今後検討すべき課題である。岩手国民高等学校における賢治の講義「農民芸術」では、「行動学、形隊〈ママ〉心理学等が進歩して来たのである、／新しい即ち創造は無意識部から生ずるのである」[「講演筆記帖」宮沢 16 上〈補遺・資料篇〉: 194] とある。さらに「農民芸術の本質」の項では、「それは直観と情緒との内経験を素材としたる無意識時に有意的なる創造である」[同: 197] とあり、賢治の述べる「心理学」は農民芸術のあり方とも関わるものであったと見られる。
- 16) また、同年 12 月 20 日付の岩波茂雄宛書簡(番号 214a)では以下のように述べられている。
わたくしは岩手県の農学校の教師をして居りますが六七年前から歴史やその論料、われわれの感ずるそのほかの空間といふやうなことにどうもおかしな感じやうがしてたまりませんでした。…わたくしは後で勉強するときの仕度にとそれぞれの心もちをそのとほり科学的に記載して置きました。その一部分をわたくしは柄にもなく昨年春本にしたのです。心象スケッチ春と修羅とか何とか題して関根といふ店から自費で出しました。[宮沢 15 〈本文篇〉: 234]
- 17) 本稿は、昭和 2 (1927) 年に「盛岡中学校校友会雑誌」への寄稿を求められ、その下書として着手されたが、完成に至らなかったと見られるものである [宮沢 4 〈校異篇〉: 778]。賢治が、出身校である盛岡中学校の生徒と実際に教えた農学校の生徒とをどのように捉えたかについては検討すべき課題であるが、賢治の生徒観を知る資料として提示したい。

謝辞

本研究の一部は、潮田記念基金による慶應義塾博士課程学生研究支援プログラムの助成を受け実施されたものである。また、本稿の執筆にあたり、熊本県立図書館および金沢大学附属図書館に暁烏関連資料を提供していただいた。深く感謝申し上げます。

凡例

- 一、全集の表記は、姓・巻・(篇)・頁数を次のように記した。例: [宮沢 2 〈本文篇〉: 132]
- 一、宮沢賢治書簡の整理番号は『新校本宮沢賢治全集』筑摩書房に則り、次のように記した。例: 保阪嘉内宛書簡(番号 74)

引用文献

一次文献

『岩手日報』1897.4-1907.2, 国立国会図書館所蔵, YB-22 (マイクロフィルム資料)

『岩手毎日新聞』1899.2-1926.12, 東京大学大学院法政学政治学研究所附属近代日本法政史料センター(明治新聞雑誌文庫)所蔵, M1-7-E (マイクロフィルム資料)

『汎濫』3 卷 1 号-8 卷 7 号, 1917-1922, 愚禿社

『薬王樹』1 卷 1 号-3 卷 12 号, 1922-1924, 香草舎

- 『願慧』4巻1号-15巻12号, 1925-1936, 香草舎
 暁烏敏 1921『独立者の宣言』丁子屋書店
 暁烏敏 1957-1960『暁烏敏全集』第1部全8巻, 第2部全20巻, 第3部全5巻, 香草舎
 暁烏敏 1976-1977『暁烏敏日記』上下, 暁烏敏顕彰会
 暁烏敏 1981『歎異鈔講話』講談社(初出は無我山房 1911)
 浩々洞編 1935『清沢満之全集』全6巻, 有光社
 島地大等 1914『漢和对照妙法蓮華経』国書刊行会(復刻版ニチレン出版 2001を使用)
 宮沢賢治 1995-2009『新校本宮沢賢治全集』全16巻・別巻, 筑摩書房

二次文献

- 石川真理子 1991「宮沢賢治の初期作品における父への順逆二様」『愛媛国文研究』(41) 38-44頁, 愛媛国語国文学会)
 今野寿美 1995「青空の脚—宮沢賢治の短歌をめぐって」『国文学解釈と鑑賞』60(9) 24-29頁, 至文堂
 碧海寿広 2014『近代仏教のなかの真宗—近角常観と求道者たち』法蔵館
 木村東吉 1994「《春と修羅第二集》の構想・試論—二次清書稿段階を中心に」『国語と国文学』71(12) 44-63頁, 明治書院
 木村東吉 1995「遊びの後に見たものは—《春と修羅第二集》岩手山麓晩秋紀行詩群考」『島根大学教育学部紀要, 人文・社会科学』(29) 1-16頁, 島根大学教育学部
 栗原敦編注 1980「宮沢賢治周辺資料—金沢大学暁烏文庫蔵暁烏敏宛宮沢政治郎書簡集」『金沢大学文学部論集 文学科篇』(1) 49-107頁, 金沢大学文学部
 栗原敦 1985「宮沢賢治周辺資料(その2)—「岩手日報」「岩手毎日新聞」記事による」『実践女子大学文学部紀要』(27) 21-43頁, 実践女子大学
 栗原敦 1992『宮沢賢治—透明な軌道の上から』新宿書房
 栗原敦 2010「宮沢賢治の仏教とはどのようなものであったか(上)—法華経との出会いまで」『実践國文學』(80) 85-100頁, 実践女子大学
 中村稔 2005「宮沢賢治ふたたび」『中村稔著作集 第2巻 詩人論』青土社
 松岡幹夫 2015『宮沢賢治と法華経—日蓮と親鸞の狭間で』昌平齋出版会
 松田司郎 2003「『復活の前』—新文明を建設し得るとき」『国文学 解釈と鑑賞』68(9) 137-143頁, 至文堂
 森隆史 1999「宮沢賢治の初期思想形成—「復活の前」から「無題(峯や谷は)」まで」『哲学と教育』(47) 49-42頁, 愛知教育大学哲学会